In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	異文化受容態度の構造
Author	向井, 有理子 / 金児, 曉嗣
Citation	人文研究. 57 巻, p.63-77.
Issue Date	2006-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	藪木榮夫教授 ： 広川禎秀教授 ： 阪口弘之教授 ： 小西嘉幸教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第57巻　2006年3月　63頁～77頁

異文化受容態度の構造

向井有理子　金児曉嗣

本研究は日本人の異文化受容態度について、多面的な尺度を作成し、その構造を明らかにするとともに、実際に行っている異文化接触行動との関係を検討することが目的である。まず、異文化受容態度と異文化接触頻度を測定するための項目を選定するために予備調査を行った。その後、本調査において、質問紙調査による異文化受容態度と異文化接触頻度の測定を行った。異文化受容態度は拒否的態度、対外国人緊張、一般的受容、個人的関心の4つの構成要素からなっていた。実際の異文化接触行動には、拒否的態度、一般的受容はあまり関係が無く、対外国人緊張や個人的関心が大きな影響を与えていることが示された。また、居住地域の都鄙性による差異が認められたのも対外国人緊張と個人的関心のみであった。異文化を肯定的に捉える態度にも、一般論としてのレベルと個人的な関心を伴ったレベルがあり、実際の行動には後者が強く影響することが明らかとなった。つまり、一般的受容と拒否的態度は異文化受容行動に対し間接的に、対外国人緊張と個人的関心は直接的に影響を与えているのではないかと考えられた。

はじめに

日本における外国人人口の割合は1990年に入る頃から急速に上昇している（財務省統計局, 2004)。また、グローバル化、国際化の進行に伴い、外国から様々な物や人が大量に流入するようになり、日本にいながらにして外国の文化や人と触れ合う機会も飛躍的に増大した。海外旅行や海外留学、海外に居住することさえより身近なものとなりつつある。異文化といかに友好的に付き合うかという問題は、特別な立場にある人たちだけの問題ではなく、すべての人に共通する問題になりつつあるといえるだろう。

これまでの異文化受容に関する研究は、例えば、渡辺（2002）のように移民や留学生など、異なる文化で暮らすことになった人々の異文化適応という観点から研究を行っているものが多い。しかし、近年の状況は自文化で暮らし続ける人々にとっても異文化の受容が重要な問題となっていることを示しており、受け入れる側を対象とした異文化受容研究も見られるようになった。塘（1999）は多数者の立場が変わりつつあると指摘し、帰国子女の受け入れを題材に受け入れ側の子どもの異文化受容について研究を行っている。教育においても、多文化共生教育が謳われるようになり、受け入れ側の変化の重要性が強調されつつある（太田, 2000)。このように、異文化とどのように向き合うのかという問題に関し、受け手である多数者側に焦点を当てた研究の必要性が高まっていることは確かである。しかし、自文化に流入する異文化に対す

る態度について、広く一般に使用可能な尺度はいまだ確立されていない。本研究はこの点に着目し、今後の異文化受容研究に向けて、一般性が高く、実際の行動予測が可能な異文化受容態度尺度を作成し、異文化受容態度の構造を明らかにするとともに、実際に異文化と関わるような行動がなされるためには異文化受容態度のどのような側面が重要であるのかについて検討することを目的とした。

これまでの異文化受容態度の測定と問題点

本研究では、異文化受容態度を自国へ入ってくる異文化や外国人に対する好意的で積極的な態度として捉え、受け入れる側の優勢文化の人々の態度を測定する。当然のことながら、異文化を受け入れる態度、拒絶する態度について質問することは必要である。しかし、実際の異文化受容行動を予測するには単に異文化の受容と拒絶を測定するだけでは十分とはいえない。Smith & Bond（1998）が異文化接触には自文化の文化的アイデンティティの高まりが伴うと述べているように、異文化との関係構築の際には、異文化への態度だけではなく自文化への態度が関わってくると考えられる。現に、多くの排外的活動は自文化中心主義、もしくは国家主義と強く結びついたものである。このように、異文化への態度には、自文化への態度からもたらされる要素があると考えられる。

向井・金児・河野・渡部・岸川・堀江・宮崎（2003）では以上の観点を踏まえ、自国と外国への態度尺度を作成し、異文化受容態度について多角的に捉えることを試みた。この研究においては、Adorno（1950）のエスノセントリズム（自民族中心主義）に関する項目、山崎・平・中村・横山（1997）のアジア系留学生の対日態度と対異文化態度の項目を修正し、異文化に対する受容と拒絶を示す一般的な項目を作成している。さらに、唐沢（1994）の国民意識尺度の下位尺度である愛国心、国家主義、国際主義の各尺度から項目を採用、一部修正を加え、使用している。調査、分析の結果、外国人拒否、異文化受容、愛国心の3つの下位尺度が構成された。向井ほか（2003）ではこれらの尺度の得点について、外国人居住者が多く、古くから外界から入ってくる物や文化、人の玄関口であった都市と、異文化との接触の機会に乏しいと考えられる村落という2つの地域による違いを調べている。結果として、生育環境が都市であるほど異文化に対し受容的であり、村落であるほど愛国心が高いという知見を得ている。また、同じ尺度を用いた渡部・金児（2004）の研究では都市に居住している人は異文化受容態度が強いことが示されている。

しかし、向井ほか（2003）や渡部・金児（2004）で使用された自国と外国への態度尺度にはいくつかの問題点がある。まず1点目は、平均値が異文化を受容する方向に偏りやすいということである。さらに2点目として、異文化交流などに実際に関心があり異文化に受容的な態度を示す場合と、実際には関心が無いにもかかわらず表面的には異文化に対し肯定的な反応をしている場合を区別することができないという問題があった。日本において多文化共生が多くの人たちの問題になりつつあるとはいえ、やはりいまだ自分の問題ではないと考える人もいるだ

ろう。太田（2000）は日本の多文化教育、多文化主義は希望的思考あるいはスローガンの域を出ていないと述べている。また、田端（2003）は、日本人は、自分は国際的ではなく時代についていけていないと捉えているが、国際化自体は必要なことであり、国際交流は推進しなければいけないと考えているところが特徴であると述べている。このように、日本人にとって異文化に対し肯定的な態度を表明することは、自分がそのような行動を実践するかどうかとは別に、望ましいことではあると捉えられているのではないか。向井ほか（2003）の項目は一般性を重視するあまりほとんどの項目は表面的な態度表明を示すものでしかなく、望ましい態度が選択されやすくなる傾向に拍車をかけた可能性が高い。このような尺度で測定された態度からは実際の行動を予測することは困難である。よって、本研究では、実際の行動予測を可能にするため、各個人の異文化受容への関心度をより明確に測定することができるような項目を新たに加えて異文化受容態度尺度を作成することにする。

異文化受容における2つの方略

実際の行動の予測のためにはより多角的に異文化受容態度を捉えなければならない。異文化を受け入れる際の受け入れ方についても大きく分けて2通りの方法がある。Greenberg, Solomon, & Pyszczynski（1997）は、異なる文化的世界観と出会ったとき人がとる行動は、歴史的にみて、相手を攻撃（全滅）する、相手を貶す、相手を同化させる、相手に合わせる（調節する）という4種類があるとしている。このうち先の2つは異文化を拒否する行動であり、あとの2つは異文化をある程度受け入れる行動であるといえる。相手を同化させるというのは、相手を自分の文化に取り入れてしまうことであり、相手を変化させることで受け入れるという受容の形である。相手に合わせるというのは、自文化のほうを相手の文化に合うように調節することであり、自分を変化させることで受け入れるという受容の形である。

本研究の異文化受容態度尺度においても、この点を踏まえ、異文化を受け入れる際に同化を求める項目と自文化の変化を求める項目を新たに作成し加えることにした。

異文化コミュニケーション不全

実際に異文化受容行動が行われるためには、異文化交流に関心を持ち、異文化に好意的な態度を有しているだけでは不十分である。異なる文化の人とのかかわりを持ってみたいと考えていても、いざ、街で外国の人に声をかけられれば緊張して話すこともできず、笑ってごまかして逃げてしまうという人も多いのではないだろうか。実際に異文化交流を行う場合には、いかにコミュニケーションをとるかということが大きな問題となる。異文化交流におけるコミュニケーションツールとしてまず思い浮かぶのは英語であろう。実際、近年では、国際化時代にふさわしい人材の育成を目指し、小学校から外国語教育、主に英語教育が行われつつある。しかし、多くの日本人にとって英語は苦手で難しい、けれども学ばなければならない強制された言語（吉武, 2002）である。そのような強制された言語である英語を使ってコミュニケーションを行うことは大変な困難を伴う。また、様々なところで聞かれる日本と外国のコミュニケーショ

ンに関わる習慣の違い、例えばジェスチャーの違いなども異文化交流に際しての戸惑いを大きくするだろう。習慣が違うということは、相手がどのような反応をするのか予測できないということでもあり、外国人と実際に対面した場合には、コミュニケーションに関する様々な不安から緊張感や警戒心を強く感じることがあると考えられる。このような緊張感や警戒心は異文化受容行動の妨げとなる。したがって、実際の異文化受容行動を予測するためには、外国人に対して感じる緊張感や警戒心を示す項目についても測定する必要がある。

本研究では、向井ほか（2003）の自国と外国への態度尺度にこれまでに挙げた必要な項目を加え、新たな異文化受容態度尺度を作成し、その構造を明らかにする。すなわち、向井ほか（2003）の項目に加え、国際化や異文化交流には無関心であることを示す項目、外国人に日本への同化を求める項目、外国人が暮らしやすいように自分たちが変わろうとする項目、外国人に対する構えや緊張、警戒心を示す項目を用いることで、多角的に異文化受容態度を測定する。

また、実際の異文化交流の程度を示す項目からなる異文化接触頻度尺度を作成し、異文化といかにかかわりを持つのか、その程度を測定する。その上で、異文化受容態度尺度と異文化接触頻度尺度の関係を調べ、実際の行動予測には異文化受容態度のどの側面が有効なのか検討したい。さらに向井ほか（2003）や渡部・金児（2004）では異文化受容態度について都市と村落に差が認められたが、より多角的に測定可能な尺度を使用することで、この差が異文化受容態度のいずれの側面においても同様に認められるものなのか、あるいは特定の側面における差が現れたものなのかについても明らかにしたい。このような過程を経ることで、実際の異文化交流行動の促進にとって、重要な異文化受容態度の側面を明確に示すことが可能になると考えた。

予備調査

異文化受容態度尺度と異文化接触頻度尺度について、先に述べた必要な要素を満たすようにできる限り多くの項目を収集、作成した後、項目の選定を行うための予備調査を実施した。

方　法

調査協力者：大阪市立大学の学生300名（男性155名、女性145名）を対象に調査を行った。協力者は共通教育科目「心理学への招待」を受講している学生であり、協力者には一定の出席点が与えられた。平均年齢は男性19.97歳（SD=5.67）、女性19.03歳（SD=2.91）であった。

調査時期：2004年７月に実施した。

調査項目

自国と外国への態度尺度：向井ほか（2003）の自国と外国への態度尺度の下位尺度、異文化受容態度尺度９項目（e.g.他の民族の文化をもっとよく知りたい）、外国人拒否尺度５項目（e.g.外国の人の住む地域を限定した方が社会の秩序を保てると思う）、愛国心尺度５項目（e.g.私は日本人であることを誇りに思う）に、あらたに外国人拒否を示す項目を３項目、愛

国心を示す2項目を加えた。また、外国人の日本人への同化を求める態度を示すもの（e.g.日本に住む外国の人には日本人のような生活スタイルをめざして欲しい）、外国人のために日本が変化することを求めるもの（e.g.外国の人が住みやすい環境を作りたい）、外国人に対する警戒心や緊張を示すもの（e.g.外国の人がたくさん集まっているとなんとなく怖く感じる）をそれぞれ10項目作成した。さらに異文化交流への無関心を表す項目（e.g.特別に外国の文化に接する機会をつくろうとは思わない）を8項目用意した。これら計62項目について、「1まったくそう思わない～5とてもそう思う」の5件法によって回答を求めた。

異文化接触頻度尺度：異文化接触、異文化交流の経験に関わる様々な項目を15項目作成した。項目は実際に外国人と積極的にかかわっていることを示すもの（e.g.外国人の友人がいる、日本に住む外国人を支援する活動に参加している）、外国文化や外国人との交流を伴う可能性の高い経験などを表すもの（e.g.外国に住んだことがある、外国人の家族・親戚がいる）、メディアなどを通した外国文化への接触を表すもの（e.g.洋楽やその他の外国音楽が好きである、海外の書物や雑誌をよく読んでいる）からなっている。いずれも、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。

結　果

自国と外国への態度の因子分析：自国と外国への態度を示す62項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、6因子が抽出された（Table1参照）。その際、共通性が低く、因子負荷量がいずれの因子にも.35以下であった18項目を削除した。第1因子は「わざわざ特別な努力をしてまで外国の人と交流したいとは思わない」（反転項目）、「他の民族の文化をもっとよく知りたい」などの項目が高く負荷していたので「個人的関心」と名付けた。第2因子には「私は日本人であることを誇りに思う」、「日本人は価値ある民族だと思う」などが高く負荷していたので「愛国心」と名付け、第3因子には「日本人に比べ外国の人は信用できない感じがする」、「最近の日本の治安の悪化には在日外国人の増加が関係していると思う」などの項目が高く負荷していたので「不信・拒否的態度」と名付けた。第4因子には「外国の人を前にするとつい身構えてしまう」、「外国の人がたくさん集まっているとなんとなく怖く感じる」などが高く負荷していたので「対外国人緊張・警戒心」と名付けた。第5因子には「外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとってよいことである」、「外国の人が住むのに不便だと感じるような習慣はないほうがよい」などが高く負荷していたので「一般的受容・調節」と名付け、第6因子には「日本に住む外国の人には日本人と同じような生活スタイルを目指してほしい」「外国の人だけの集まりなどをするのは好ましくない」などが高く負荷していたので「同化」と名付けた。

第2因子の愛国心については異文化受容態度とは概念的に別のものであると考えられる。向井ほか（2003）においても愛国心は異文化受容態度とは他の変数からの影響に違いがあり、区別して捉える必要が示唆されている。本調査では異文化受容態度のみを扱うために、第2因子

Table1：自国と外国への態度の因子負荷行列表

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	共通性	Mean	SD
Ⅰ：個人的関心										
33)	わざわざ特別な努力をしてまで外国の人と交流したいとは思わない	**-.80**	.13	-.04	.07	.04	.00	.65	2.69	1.19
19)	他の民族の文化をもっとよく知りたい	**.76**	-.08	.11	.06	.07	-.06	.56	3.89	1.07
46)	異なる民族の友人がたくさんほしい	**.75**	-.06	.08	-.09	.06	-.10	.64	3.62	1.06
10)	特別に外国の文化に接する機会をつくろうとは思わない	**-.74**	.08	-.07	.08	.01	-.03	.55	2.63	1.16
4)	異なる民族の人びととともっと深くつきあいたい	**.72**	-.01	.11	-.03	.09	-.14	.57	3.75	1.07
47)	機会があれば外国人に私たちの習慣や言葉を教えるボランティアをしたい	**.68**	.06	-.04	-.02	.10	.15	.56	3.06	1.22
45)	国際化や異文化交流などは私とは縁のないことである	**-.67**	.01	.11	.12	.20	-.10	.50	2.10	0.99
23)	外国の人に日本の良いところをたくさん知ってもらえるような活動をしてみたい	**.66**	.12	-.01	.02	.05	.13	.48	3.45	1.08
7)	外国の文化や外国の人たちのことには興味がない	**-.63**	.00	.03	-.17	.09	.14	.36	1.56	0.83
44)	自分の地域に外国の人が住むことになったら、地域の習慣などを率先して教えたい	**.62**	.11	-.05	.02	-.03	.20	.43	3.10	0.99
34)	外国の人とつきあうと視野が広がるのでよいと思う	**.60**	-.01	-.10	.07	.11	-.11	.47	4.33	0.74
49)	機会があれば国際的な舞台で活躍したいと思う	**.59**	.01	.18	.02	-.02	-.11	.32	3.63	1.18
27)	外国の人とは文化が違って初めはわかりあえなくても、あきらめずにわかりあえるまで努力したい	**.56**	-.02	-.34	.10	.07	.12	.57	3.75	0.96
36)	日本に住む外国の人が増えたとは言え、私とは関係のない話である	**-.53**	.03	.19	.18	.25	-.12	.40	2.55	1.09
15)	外国の人にはどんどん自分の国の文化を日本人に紹介してほしい	**.46**	.06	-.06	.15	.16	-.09	.31	4.19	0.79
50)	外国の人が住みやすい環境を作りたい	**.45**	.08	-.19	.03	.28	.07	.47	3.43	0.87
2)	外国の人の多い地域には住みたくない	**-.43**	.14	-.11	.32	-.07	.21	.47	2.73	1.18
52)	国際化の今こそ伝統的な日本文化や日本的な慣習の保護をしなければならない	**.39**	.21	.11	.14	-.13	.11	.22	3.76	0.92
Ⅱ：愛国心										
42)	私は日本人であることを誇りに思う	.05	**.82**	-.03	-.07	.11	.08	.65	3.55	1.09
31)	日本人は価値ある民族だと思う	.19	**.63**	.12	.04	.04	-.04	.46	3.51	0.92
20)	生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい	-.22	**.53**	-.08	-.04	-.02	.06	.31	3.51	1.21
22)	日本が戦後に驚くほどの経済成長をとげたのは、国民が優秀だからだ	-.07	**.45**	.30	-.14	.10	-.02	.33	2.84	1.08
57)	日本は世界に貢献していると思う	.06	**.45**	.11	-.08	-.10	-.16	.28	3.56	0.92
1)	日本は世界で一番よい国である	-.13	**.45**	.03	-.01	-.02	.01	.23	2.73	1.24
30)	日本だけで通用するような習慣や常識などにはあまり意味はない	-.01	**-.40**	.12	-.15	.24	.10	.27	2.34	1.09
Ⅲ：不信・拒否的態度										
39)	日本人に比べ外国の人は信用できない感じがする	.02	.05	**.59**	.21	.10	.04	.43	2.72	1.04
11)	最近の日本の治安の悪化には在日外国人の増加が関係していると思う	.21	.11	**.54**	.04	-.18	.01	.39	2.87	1.26
6)	海外援助をするなら、日本の利益にならないような援助はすべきではない	-.11	.04	**.53**	.07	.12	-.01	.32	2.36	1.17
32)	外国の人の日本滞在についてはもっと厳しい法律と取り締まりが必要だと思う	.15	.00	**.41**	.12	-.19	.18	.31	2.85	1.05
56)	よく知らない外国の人とすぐに親しくなるのは問題だと思う	-.05	-.03	**.41**	-.04	.09	.22	.23	2.48	1.06

14)	長く日本に住んでいても、外国の人には日本人と同じ権利がないのは仕方がない	-.12	.02	**.39**	-.11	-.17	.00	.27	2.02	1.14
29)	日本の会社では、外国の人を管理職にしないほうがうまくいくと思う	-.18	-.07	**.38**	.01	.18	.21	.26	2.35	1.00
Ⅳ：対外国人緊張・警戒心										
26)	外国の人を前にするとつい身構えてしまう	.01	-.12	.04	**.78**	-.01	-.20	.57	3.61	1.03
24)	外国の人がたくさん集まっているとなんとなく怖く感じる	.03	-.02	.13	**.63**	-.07	.05	.46	3.25	1.13
58)	日本人と話すときに比べ、外国の人とは緊張してうまく話すことができない	.02	.03	.04	**.52**	.12	-.01	.28	3.77	1.07
16)	隣の家に外国の人が住むことになったら近所づきあいなどの面で不安を感じる	-.03	-.06	.13	**.38**	-.19	.18	.33	2.74	1.20
Ⅴ：一般的受容・調節										
51)	外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとってよいことである	-.04	.12	-.01	-.03	**.56**	-.19	.33	3.57	0.85
37)	外国の人が住むのに不便だと感じるような習慣はないほうがよい	-.05	-.19	-.02	.07	**.46**	.18	.31	2.29	0.98
41)	外国の文化がたくさん入ってきてこそ、日本文化を発展させることができる	.12	.06	.05	-.01	**.43**	-.02	.22	3.38	0.96
17)	もっと日本人はいろいろな部分で外国の人を受け入れていかなければならない	.26	-.02	-.16	.06	**.41**	-.04	.41	3.97	0.90
5)	外国の人がたくさん日本に来ることで、日本の古いしきたりが変わっていくと良いと思う	.07	-.15	.15	-.03	**.41**	.09	.22	2.53	1.03
Ⅵ：同　化										
18)	日本に住む外国の人には日本人と同じような生活スタイルを目指してほしい	-.03	.00	.01	-.04	-.10	**.62**	.39	2.42	1.03
53)	外国の人だけの集まりなどをするのは好ましくない	.16	-.07	.28	-.07	.08	**.60**	.45	2.29	0.98
54)	外国の人の住む地域を限定したほうが、社会の秩序を保てると思う	-.10	.01	.26	-.01	.04	**.43**	.31	1.73	0.78
寄与率		7.41	2.38	2.24	1.84	1.66	1.53			
因子間相関	Ⅰ		.00	-.32	-.28	.35	-.07			
	Ⅱ			.23	.08	-.27	.09			
	Ⅲ				.17	-.31	.17			
	Ⅳ					-.06	.30			
	Ⅴ						-.06			

削除項目

3) 日本になじまないような外国の人にはあまり日本に来てほしくない
8) 外国の人にはどうせ日本のことはよくわかってもらえないと思う
9) 地域に外国の人がいれば、その地域の自治会ではその人に合わせた活動をすることも大切だ
12) 外国の人とはとりあえずある程度距離をおいて付き合いたい
13) 日本の習慣になじめない外国人は迷惑だ
21) さしあたって外国人移民の問題は重要な問題だとは思わない
25) 日本の文化と外国の文化の両方を同じように尊重していかなければならない
28) 日本に住むなら外国の人でも日本語を使うように努力してほしい
35) 伝統的な日本らしさを求めるような外国の人はあまり好きではない
38) 日本は諸外国から学ぶことが多い
40) 住まいや公共の施設などで外国人向けに特別な設備やサービスを作る必要はない
43) 外国の人が日本で働く場合には、特定の職種に限定するほうがよい
48) 外国人も日本人も本質的には変わらないと思う
55) 国際化時代に向けて日本語よりも英語が重要だと思う
59) 今後、海外旅行以外に外国の人に接することはないと思う
60) 物価の安い外国で暮らすより、少々高くても日本に暮らしたい
61) 日本で暮らす外国の人にはいつまでも日本にいたいと思って欲しい
62) 日本人は日本人と、それぞれの国の人はそれぞれの国の人と付き合うのが一番だと思う

に高く負荷した項目は分析に加えず、異文化とのかかわりを直接示す項目のみを使用することにした。

なお、本調査においては調査項目数を減らす必要があったため第1因子並びに第3因子から第6因子それぞれに高く負荷した上位4項目ずつを異文化受容態度尺度の項目として採用した。ただし、第5因子の「一般的受容・調節」の因子では高く負荷した項目が3項目であったため、本調査にも3項目のみを採用した。

異文化接触頻度尺度：異文化との接触を示す15項目についてカテゴリカル主成分分析を行った。2つの主成分を抽出した。いずれの主成分に対しても成分負荷が低い5項目を削除し、さらに、横軸に第1主成分を、縦軸に第2主成分をとり、平面上に表した場合に各主成分との関係が他の項目とは著しく異なっていた1項目を削除した。残りの9項目については、第1主成分には「外国人の友人がいる」「外国人のメル友、ペンフレンドがいる」など人との交流を示す項目が高く負荷し、第2主成分には「海外の雑誌・書物をよく読んでいる」「インターネットで海外のサイトをよく見ている」などメディアによる接触を示す項目が高く負荷していた。

本調査に際しては、項目数の削減が必要であったため、「外国人の友人がいる」と「外国人の知人がいる」という2項目はあわせて「外国人の友人・知人がいる」という項目にまとめた。また、予備調査の協力者は学生であったが、本調査は20代から70代の幅広い年齢層の人々を対象とするため、「海外留学の経験がある」という項目への回答は大きく異なってくることが予測される。この項目については、「外国に住んだことがある」という項目にある程度集約されると判断し、本調査の項目からは削除した。

本調査

方法

調査協力者と調査手続き：関西圏の都市部（大阪市）と村落部に居住する20歳～80歳の有権者を対象に、選挙人名簿をもとに2段階無作為抽出法により2700名（都市部1500名、村落地域1200名）を抽出し、郵送により質問紙の配布と回収を行う方法で調査を行った。調査協力者には後日図書券500円分が謝礼として送られた。有効回答率は都市30.5%、村落40.6%、全体35.0%であった。

調査協力者は都市458名（男性196名、女性262名）、村落が487名（男性236名、女性251名）であった。平均年齢は、都市の男性50.96歳（SD=16.29）、女性52.98歳（SD=16.38）、村落の男性56.99歳（SD=14.89）、女性55.15歳（SD=15.76）であった。

調査時期：2004年8月に実施した。

測定尺度

異文化受容態度尺度：予備調査において抽出された6因子のうち愛国心因子を除く他の各因

子にそれぞれ高く負荷した19項目を使用した。いずれも「1まったくそう思わない～5とてもそう思う」の5件法によって回答を求めた。

異文化接触度尺度：予備調査での分析の結果得られた実際の人との接触を伴うもの3項目とメディアを通したもの4項目、計7項目を異文化接触頻度尺度の項目として使用した。協力者には「はい」「いいえ」の2件法による回答を求めた。「はい」の数を数え、それを異文化接触得点とした。

結　果

異文化受容態度尺度の因子分析：主因子法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、4因子が抽出された。いずれの因子にも因子負荷量が.40未満であり、共通性も低かった2項目を削除した。予備調査での「不信・拒否的態度」因子と「同化」因子に高く負荷してい

Table2：異文化受容尺度の因子負荷行列表

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	M	SD	共通性
Ⅰ：拒否的態度（α=.75）							
13) 外国の人の日本滞在についてはもっと厳しい法律と取り締まりが必要だと思う	.75	-.03	-.01	-.09	3.61	1.01	.48
7) 最近の日本の治安の悪化には在日外国人の増加が関係していると思う	.70	-.02	.03	-.13	3.66	1.05	.40
22) 外国の人だけの集まりなどをするのは好ましくない	.52	.02	-.06	.02	2.79	1.02	.32
16) 外国の人の住む地域を限定したほうが、社会の秩序を保てると思う	.49	-.02	-.05	.14	2.28	1.01	.34
5) 日本に住む外国の人には日本人と同じような生活スタイルをめざしてほしい	.48	-.05	.14	.09	2.79	1.07	.22
18) 日本人に比べ外国の人は信用できない感じがする	.48	.12	-.08	.09	2.95	1.00	.40
1) 海外援助をするなら、日本の利益にならないような援助はすべきではない	.42	-.06	.02	.07	2.85	1.21	.18
Ⅱ：対外国人緊張（α=.70）							
8) 外国の人を前にするとつい身構えてしまう	-.08	.77	.01	-.02	3.14	1.09	.53
19) 日本人と話すときに比べ、外国の人とは緊張してうまく話すことができない	-.09	.76	.05	.06	3.57	1.13	.54
12) 外国の人がたくさん集まっているとなんとなく怖く感じる	.20	.60	-.07	-.04	3.16	1.10	.52
Ⅲ：一般的受容（α=.69）							
10) 外国の文化がたくさん入ってきてこそ、日本の文化を発展させることができる	.12	-.02	.74	.04	3.54	0.94	.47
21) 外国の文化を積極的に取り入れることは、日本にとってよいことである	.01	.02	.71	-.01	3.66	0.88	.50
4) もっと日本人はいろいろな部分で外国の人を受け入れていかなければならない	-.17	.03	.52	-.03	3.56	0.92	.38
Ⅳ：個人的無関心（α=.70）							
2) 特別に外国の文化に接する機会をつくろうとは思わない	.00	.04	.10	.64	2.58	1.06	.36
14) わざわざ特別な努力をしてまで外国の人と交流したいとは思わない	.16	.03	.08	.59	3.10	1.05	.43
8) 他の民族の文化をもっとよく知りたい	.17	.02	.22	-.58	3.67	0.96	.44
20) 異なる民族の友人がたくさんほしい	-.08	.04	.09	-.57	3.08	1.07	.42
寄与率	2.36	1.55	1.44	1.49			
因子間相関 Ⅰ	1	.45	-.36	.50			
Ⅱ		1	-.24	.38			
Ⅲ			1	-.60			

削除項目
3) 隣の家に外国の人が住むことになったら近所づきあいなどの面で不安を感じる
15) 外国の人が住むのに不便だと感じるような習慣はないほうがよい

た項目が主に第1因子に高く負荷しており、これを「拒否的態度」因子と名付けた。さらに、予備調査における「対外国人緊張・警戒心」因子、「一般的受容・調節」因子、「個人的関心」因子に高く負荷していた項目は、それぞれ第2因子、第3因子、第4因子に高く負荷した。因子名を整理し、第2因子を「対外国人緊張」、第3因子を「一般的受容」、第4因子を「個人的無関心」と名付けた。Table2は因子分析の結果を示すものである。

各々の因子に高く負荷している項目を用いて信頼性係数を求めたところ、比較的高い値が得られた（α＝.69～.75）ため、それぞれを異文化受容態度尺度の下位尺度として尺度構成した。いずれも各項目得点を合計し、項目数で除したものを下位尺度得点とした。ただし、「個人的無関心」因子については得点が高くなるほど関心が高くなるように得点化し、個人的関心尺度とした。各協力者について、拒否的態度得点、対外国人緊張得点、一般的受容得点、個人的関心得点の4つの下位尺度得点を算出し、分析に用いた。

各尺度得点間のピアソンの積率相関係数はTable3に示すとおりである。いずれの相関係数も0.1%水準で有意であった。特に個人的関心得点と一般的受容得点の相関が高く、次いで個人的関心得点と拒否的態度得点、対外国人緊張得点と拒否的態度得点の相関が高かった。

Table3：各下位尺度得点間の相関係数

	対外国人緊張	一般的受容	個人的関心
拒否的態度	.36***	-.29***	-.41***
対外国人緊張	–	-.17***	-.30***
一般的受容		–	.46***
個人的関心			–

*** p<.001

異文化接触頻度尺度のカテゴリカル主成分分析：異文化接触頻度尺度の7項目についてカテゴリカル主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分への負荷が高かった。Table4はカテゴリカル主成分分析の結果を示している。また、7項目の信頼性係数についても十分に高い値（α＝.99）が得られたため、使用した7項目について、「はい」の数を算出し、異文化接触頻度得点として分析を行った。この得点が高くなるほど異文化接触頻度が高いことを示している。

異文化接触頻度について都市と村落の地域別に平均値を求めたところ、都市のほうが村落に比べ有意に値が高く（t(808)=7.30, p<.0001、Figure1参照）、都市地域の住民は村落地域の住民に比べ、異文化との接触の頻度が高いことが示された。Fischer（1976）が都市は古くから

Table4：異文化接触頻度尺度の成分負荷行列表

項　　目	I	「はい」の比率
I：異文化接触頻度（α＝.99）		
1）インターネットで海外のサイトをよく見ている	.97	.05
2）外国人の友人・知人がいる	.98	.14
3）海外のドラマや映画をよく見ている	.88	.48
4）外国に住んだことがある	.97	.04
5）海外の書物や雑誌をよく読んでいる	.96	.08
6）外国人のメール友達・ペンフレンドがいる	.99	.04
7）洋楽やその他の外国音楽が好きである	.97	.40

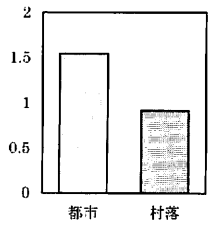

Figure1：異文化接触頻度の居住地域別平均値

異文化接触の舞台であると述べているように、都市の人々は異文化に接したり、外国人との交流行動をより多くとっているといえる。

異文化受容態度と異文化接触頻度との関係：異文化受容態度尺度の各下位尺度得点と異文化接触頻度得点についてピアソンの積率相関係数を算出した。異文化接触頻度得点と拒否的態度得点との相関は$r=-.24$、対外国人緊張得点との相関は$r=-.29$、一般的受容得点との相関は$r=.20$、個人的関心得点との相関は$r=.41$であった。これらは、いずれも1％水準で有意であった。特に個人的関心との相関が高く、異文化接触は個人的関心との関係が強いことが示されている。

また、異文化接触頻度得点を目的変数とし、異文化受容態度尺度の各下位尺度得点を説明変数として重回帰分析をおこなった。その結果はTable5に示すとおりである。異文化接触頻度に対しては対外国人緊張と個人的関心の影響が強く、拒否的態度や一般的受容は影響を与えていなかった。

Table5：異文化接触度を目的変数とした重回帰分析

	標準化係数
拒否的態度	-.02
対外国人緊張	-.18***
一般的受容	.01
個人的関心	.34***
調整済みR^2	.20***

注）*** $p<.001$

異文化受容態度の都鄙差：異文化受容態度の各下位尺度得点について、都市と村落の住民別に平均値を求め(Figure2参照)、その差についてt検定を行った。その結果、対外国人緊張得点（$t(909)=2.65$, $p<.01$）、個人的関心得点（$t(906)=2.04$, $p<.05$）には都市と村落の間に有意な差が認められた。しかし、拒否的態度得点（$t(891)=-0.61$）と一般的受容得点（$t(909)=-0.15$）については有意な差は認められなかった。

つまり、都市の住民は村落の住民に比べ、対外国人緊張が低く、個人的関心が高かった。しかし、拒否的態度や一般的受容については都市と村落に差が無いことが示された。

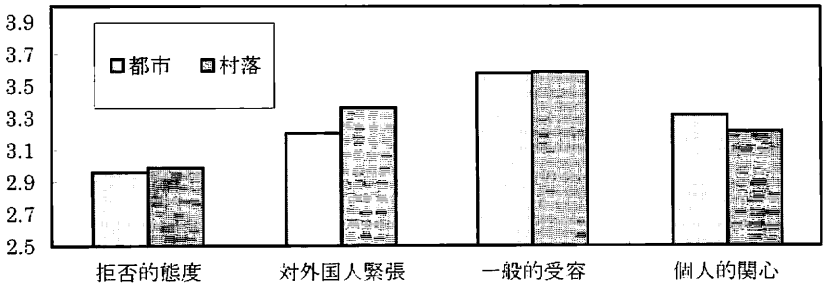

Figure2：異文化受容態度の各平均値（居住地域の都鄙別平均値）

考　察

まず、因子分析の結果をみると、向井ほか（2003)、及び本研究の予備調査、本調査の3つの調査結果においてそれぞれ異なる因子構造が得られている。向井ほか（2003）の自国と外国への態度尺度では異文化受容に直接関わる下位尺度は拒否的態度と異文化受容の2つであった。拒否的態度因子については予備調査の不信・拒否的態度因子、本調査の拒否的態度因子とほぼ

同様のものであると判断される。向井ほか（2003）の異文化受容因子は、本研究においては一般的受容と個人的関心という2つの因子に分かれたといえる。本研究の異文化受容態度尺度においては、表面的な受容態度と実際の行動に結びつくような異文化交流への関心が区別されているといえる。しかし、異文化受容の形態として同化と調節という2通りの方法があると予測したが、これについては予備調査においては同化因子が得られたものの、本調査の分析では、この因子は拒否的態度因子に吸収された形となった。このことは、外国人に日本文化や日本式の生活への同化を求めるような態度は、一見異文化を受け入れているようであっても、厳密には異文化に対する拒絶的な態度と結びつくものであることを示唆している。移民政策や外国人子女及び帰国子女への教育政策は、かつて多くの国において同化を支援するものであった(e.g. 天野, 1997; 佐久間, 1998; 太田, 2002)。こうした政策については、近年、批判が集まり、多文化共生主義へと転換しつつある。こうした事実も、同化という受け入れ方が実際には拒否的な態度と通じるものであることの現われといえるかもしれない。対外国人緊張は、これまでの尺度にはまったく含まれていなかった新しい異文化受容態度の側面である。しかも、この尺度は他の下位尺度と有意に関連しており、異文化受容態度の重要な側面であることが示された。日本の全人口に占める外国人人口の割合は1.03%（2000年度国勢調査、財務省統計局, 2004）であり、他の先進国に比べると非常に低い比率である（日本労働研究機構, 2002)。日本においてはいまだ異文化交流は多くの人にとってなじみのあるものとはいい難いのかもしれない。つまり、外国人とは未知の存在であり、そうした人々への構えや警戒心についての言及なしに彼らとの交流について検討することは出来ないであろう。

異文化受容態度尺度と異文化接触頻度得点との関係からは、個人的関心の強さと外国人に対する緊張度の低さが異文化接触を促進するという結果が得られた。一方、拒否的な態度や一般的な受容態度は異文化接触頻度との間に関係が認められなかった。拒否的態度や一般的受容の中には、表面的な同意や非同意が多分に含まれていると考えられる。拒否的態度得点の平均値は中位点（3点）付近であるが、一般的受容得点は全般的に高い平均値を示している。しかし、このような表面的な態度よりも、異文化交流への関心度や実際に外国人を前にすることに対する抵抗感が、現実の異文化受容行動を左右していると考えられる。拒否的態度や一般的受容は、これら個人的関心や対外国人緊張への影響を通じて間接的に異文化受容行動に影響を与えているのかもしれない。

都市と村落による異文化受容態度の地域差に関しても、個人的関心と対外国人緊張については先行研究（向井ほか, 2003; 渡部・金児, 2004）と同様の地域差が認められたが、一般的受容と拒否的態度については認められなかった。この結果から、先行研究の異文化受容態度には本研究における一般的受容の要素と個人的関心の要素の両方が含みこまれていたのではないかと考えられる。都市の住民の特徴は、村落の住民に比べ、異文化交流への関心が高く、外国人に対しても構えることが少なく、異文化接触頻度が高いことであった。一般的受容や拒否的態

度について地域差が認められなかったことは、これらの2つの態度については社会的に望ましい回答をしようとする反応傾向による影響が強いことを示唆している。

本研究の結果から、異文化受容態度には規範的要素が含まれており、規範に従った表面的な意見表明をする社会的側面と、その人の持つ関心や抵抗感といった個人的側面があることが示された。Ajzen & Fishbein (1977) は測定されている態度が一般的でかつ行動が限定されている場合、言行は不一致であると示しており、一般性の高い一般的受容や拒否的態度は実際の行動とは必ずしも一致しないといえる。つまり、実際の行動の予測については社会的な側面は2次的なものであり、個人的側面の影響が強いと考えられる。

結　論

本研究の目的は、異文化受容態度を多角的に把握し、行動予測の可能な尺度を作成し、異文化受容態度の構造を明らかにするとともに、実際の異文化受容行動へとつながる要因を明らかにすることであった。結果は、本研究で作成した尺度が当初の目的にかなうものであることを示している。また、異文化受容態度の構造、及び異文化受容行動との関係についてもいくつか特筆すべき点が明らかになった。

第1に異文化を受け入れる態度が一般論として肯定するレベルと、個人的な関心を伴うレベルとに分かれていることである。受容態度についてはさらに同化と調節という2形態を想定していたが、相手に自身の文化への同化を求める態度は、むしろ異文化を拒否する態度と同質のものであることが示唆された。また、外国人に実際に接した時などに感じる緊張感や警戒心が異文化受容態度の他の側面と関連していることが見出され、この側面も異文化受容態度の重要な構成要素であることが示された。

次に、異文化接触行動との関係については、対外国人緊張と個人的関心が実際の行動に直接的に寄与しており、拒否的態度や一般的受容は直接的な影響を与えてはいないことがわかった。これら4つの下位尺度間には有意な相関が認められたことから、拒否的態度や一般的受容は対外国人緊張や個人的関心に影響を与えることによって、間接的に実際の行動に関係するのではないかと考えられる。異文化を受け入れ外国人に寛容な態度をとることには規範的な要素があるため、実際の行動の有無に関わらず、拒否的態度項目への非同意や一般的受容態度項目への同意が起こる可能性は高い。そのため、これらの尺度と行動の関連が希薄になると考えられる。

異文化受容態度は多面的な構造を持っており、1つの側面だけで異文化受容行動が予測できるわけではないといえる。受容的な意思を持ち、異文化交流に関心があるだけでなく、外国人に対する構えた態度が無いことも異文化受容行動の実践には重要であろう。また、相手の同化を求める態度など限定的な受容態度は異文化への拒否的な態度に通じており、多文化共生の実現には、そうした態度も含めた異文化への拒否的な態度を払拭せねばならない。

最後に本研究における異文化受容態度尺度の問題点について言及したい。本研究の異文化受容尺度では、「外国人」「異民族」「異文化」「外国の文化」といった表現が用いられ、特定の文化や人種を想定したものではなかった。しかしながら、日本人は総じて西欧先進国の白人には好意的態度を示すが、黒人や朝鮮民族には非好意的な態度を示すという知見も存在する（我妻・米山, 1967; 中村, 1999)。したがって、回答者がどのような外国人を思い浮かべるかによって回答が大きく異なってしまう可能性がある。さらに、外国人について尋ねられた場合、日常的に外国人に接している人とそうでない人とでは異文化交流に対する現実性も異なるであろう。外国人や異文化交流がどれほど実感を持って捉えられるかによって尺度による行動予測の精度が左右される可能性もある。より精確な行動予測を可能にするためには、このような点も考慮に入れて改良を重ねる必要がある。

【付記】
本研究は大阪市立大学都市文化研究センターにおいて、COE研究事業の一環として行われた。また、一部日本学術振興会特別研究員奨励費を受けて実施されている。また、本論文執筆にあたって向井有理子が指導教員の池上知子先生にご助言いただきました。記して深く感謝いたします。

【引用・参考文献】

Adorno, T. W. 1950 *The authoritarian personality*. New York: Harper & Brothers.（田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳 1980『権威主義的パーソナリティ』青木書店）

Ajzen, I., & Fishbein, M. 1977 Attitude-behavior relation: A theoretical analysis and review of empirical research. *Psychological Bulletin*, 84, 888-918.

我妻洋・米山俊直 1967『NHKブックス55　偏見の構造：日本人の人種観』日本放送出版協会

天野正治 1997「ドイツにおける異質との共存を目指す教育」天野正治（編）『ドイツの異文化間教育』(pp.1-57, 第1章）玉川大学出版部

Fischer, C. S. 1976 *The urban experience*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.（松本康・前田尚子訳 1996『都市的体験—都市生活の社会心理学』未来社）

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. 1997 Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, (vol.29, pp.61-139.). San Diego, CA: Academic Press.

唐沢穣 1994「日本人の国民意識構造とその影響」『日本社会心理学会第35回大会発表論文集』pp.246-247.

日本労働研究機構 2002 データブック国際労働比較 2003 日本労働研究機構

向井有理子・金児曉嗣・河野由美・渡部美穂子・岸川真理子・堀江尚子・宮崎弦太 2003「都市住民と村落住民の生活様式と価値観の特徴(4)－自尊心と異文化への態度－」『日本社会心理学会第44回大会発表論文集』pp.728-729.

中村真 1999「日本人の人種・民族：ステレオタイプと偏見」岡隆・佐藤達哉・池上知子（編）『現代のエスプリ384：偏見とステレオタイプの心理学』, (pp.87-98), 志文堂

太田晴雄 2000「ニューカマーの子どもの学校教育－日本的順応の再考」江原武一編著『多文化教育の国際比較：エスニシティへの教育の対応』(pp.284-308, 第4章）玉川大学出版部

佐久間孝正 1998『変貌する多民族国家イギリス：「多文化」と「多分化」にゆれる教育』明石書店

Smith, P. B., & Bond, M. H. 1998 *Social Psychology across cultures*. London : Prentice Hall.

田端純一郎 2003「グローバリゼーションと日本人の心理」横浜商科大学公開講座『グローバリゼーションの衝撃と課題：その諸相』(pp.144-164) 南窓社

塘利枝子 1999『子どもの異文化受容』ナカニシヤ出版
山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 1997「アジア系留学生の対日態度および対異文化態度形成におけるエスニシティの役割」『教育心理学研究』, 第45巻 2 号, pp.119－128.
吉武正樹 2002「異文化コミュニケーションにおける言語選択－「英語の普及」をどう捉えるか－」伊佐雅子監修『多文化社会と異文化コミュニケーション』(pp.67-86, 第 4 章) 三修社
渡部美穂子・金児曉嗣 2004「都市は人の心と社会を疲弊させるか？」『都市文化研究』, 第 3 巻, pp.97-117.
渡辺文夫 2002『セレクション社会心理学22 異文化と関わる心理学：グローバリゼーションの時代を生きるために』サイエンス社
財務省統計局 2004「平成12年度国税調査　外国人に関する特別集計結果」財務省統計局 http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/index.htm

(向井有理子 大学院文学研究科後期博士課程)
(金児曉嗣 大阪市立大学学長)

【2005年 9 月20日受付, 11月 4 日受理】

The structure of receptive attitudes toward different cultures

MUKAI Yuriko　KANEKO Satoru

Abstract: This study investigates the structure of receptive attitudes toward different cultures and their relationship to actual cross-cultural contacts. We developed a new scale that enabled us to measure multiple aspects of receptive attitudes toward different cultures. First, a preparatory survey was conducted to choose the relevant items for scales. Then, in a main survey, participants completed questionnaires concerning receptive attitudes toward different cultures and the degree of cross-cultural contact they had experienced. Receptive attitudes toward different cultures revealed four subcomponents: attitudes of denial; tensions about foreigners; personal interest; and generally receptive attitudes. Attitudes of denial and generally receptive attitudes didn't relate to actual cross-cultural contact, however, tensions about foreigners and personal interest did. In addition, there were significant differences between rural and urban people but only in the tensions about foreigners and the personal interest. Receptive attitudes toward different cultures consist of general and personal levels, although only personal levels directly affected actual receptive behaviors. That is to say, generally receptive attitudes and attitudes of denial indirectly influence receptive behaviors while tensions about foreigner and personal interest directly affect them.